

黒河流域の民族構成についておしえてください

尾崎孝宏（鹿児島大学）

● はじめに

ここでは、黒河流域を下流・中流・上流（甘粛側）・最上流（青海側）に4分類し、それぞれを代表する行政単位として内モンゴル自治区エチナ旗・甘粛省張掖市・甘粛省肅南ユウグ族自治県・青海省祁連県を取り上げ、各地域において近年刊行された地方誌における民族構成・人口などに関するデータを紹介することにしたい。なお、今回は記載されているデータの正確さに関しては敢えて立ち入らないことにする。個人的には、こうした数値が完全に正確であるとはいいがたいが、かといって全く無根拠の捏造データというわけでもなく、ある程度の目安としては使用に耐えるのではないかと、という印象を持っている。

個々の地方誌の名称、出版年次、記載されている最新データの年次については表1の通りである。これを見ると、出版年次が新しい場合でも記載されているデータは現状とは10年以上のブランクが存在することが明らかになる。なお、これら地方誌の構成については、細かい点での異動は多いものの、基本的な構成および記載事項の分類においては大きな差はない。例えば出版年次が最も古い『祁連県誌』の場合、表2のような構成となっている。

表1：使用した地方誌一覧

地方誌の名称（漢語表記）	出版年次	記載されている最新データの年次
エチナ旗誌（額济纳旗志）	1998 年	1990 年
張掖市誌（張掖市志）	1995 年	1990 年
肅南ユウグ族自治県誌（肅南裕固族自治县志）	1994 年	1990 年
祁連県誌（祁連县志）	1993 年	基本的に 1985 年、ただし農牧業・財政は 1989 年ないし 1990 年まで記載あり

表2：『祁連県誌』の構成

	タイトル	具体的内容
第一編	概述	祁連県概要
第二編	大事記	編年形式での重大事件の記載
第三編	地理	位置、区画、自然環境、人口
第四編	経済	牧畜業、農業、林業、工業、商業、水利、交通、通信、財政など
第五編	政治	中国共産党、大衆団体、政府、民政、警察、軍事など
第六編	文化	教育、民族教育、科学技術、文化、体育、医薬衛生
第七編	社会	人民生活、民族、宗教、風俗習慣、方言
第八編	人物	人物伝、紅軍戦士・労働模範などの人物表
第九編	付録	重要文献の転載など

● 下流域（内モンゴル自治区エチナ旗）

『エチナ旗誌』においては、民族に関する言及は「第2編 民族・人口」に存在する。エチナ旗は内モンゴル自治区にあるのでまずモンゴル族に関する言及から始まり、相対的に多くのページが割かれている。

モンゴル族：

基本的にはドゥルベト（オイラトの一派）で、1698年（康熙37年）にボルガ河流域から戻ってきた。

先に戻った一波なので「旧ドゥルベト部」と呼ばれる。理藩院直轄の「特別旗」であった。

その他、1921年以後ハルハ貴族メーリンチンロブが150戸400人余りを引き連れてエチナに来た。1941年に一部が帰国したが、その大部分はエチナの「僑郷」の名前があるウントゴル＝ソムに現在まで住んでいる。1989年の資料（民政部）によれば、ハルハのモンゴル族62人、その家族は192人である。

1958年6月、バヤンノール盟行政公署の批准により、アラシャン旗拐子湖バグがエチナ旗の管轄となった。この際、現地に居住していた（以前に移入してきたらしい）ホショートモンゴル族120戸500人がエチナ旗の管轄となった。

1956年にエチナ旗が内モンゴル自治区の管轄となってから、東部地区のモンゴル族幹部を派遣して仕事に従事させた。また、大学・高校卒業者や親族などの流入が続いた。彼らの大多数はダライフ鎮に居住している。

1964年の人口センサスでは、全旗のモンゴル族は3128人で、1949より1182人増加（つまり1946人だった）。1982年の第3回人口センサスでは4219人、1990年7月1日の第4回人口センサスでは4988人で、総人口の34.44%を占めている。

表3：エチナ旗の総人口およびモンゴル族人口

	1949年	1964年	1982年	1990年
総人口	2255	7159	13630	15102
モンゴル族人口	1946	3128	4219	4988
モンゴル族人口比	86.3%	43.7%	31.0%	33.0%

（額济纳旗志编纂委员会 1998:126-129）

一方、その他の民族に関する記述は以下の通りである。

漢族：

中華人民共和国成立以前、エチナに居住する漢族は駐在軍を除けば、大多数は承認であり、ついで雇われ牧夫であった。また、大規模な移住は存在しなかった。

中華人民共和国成立以後、党と上級政府はエチナ旗の産業発展のために、その当時の区画に応じて寧夏・甘肅・内モンゴルなどから幹部を投入し、大学の卒業生が国家配分され、近隣の省から労働者を招致し、退役軍人を定着させ、天津・蘭州などから下放青年を受け入れてきた。さらに、1969年以降は全国的な「農業は大寨に学べ、工業は大慶に学べ」運動の普及により、エチナ旗でも工業・農業が発展する中で求人増加により各地からエチナに移住する者が増えた。1982年の第3回人口センサスでは漢

族人口は9492人に達し、総人口の67.7%を占め、1990年の第4回人口センサスでは10141人にまで増加し、総人口の65.83%を占めている。漢族の分布は全旗に及ぶ。

回族：

1990年の第4回人口センサスでは161人、1.85%であった。中華人民共和国成立以前は12人であり、全員が商売をしていた。現在、主にダライフブ鎮に居住し、商売をしている。

チベット族：

1947年、全旗でチベット族が28人おり、全員がラマであった。1982年の第3回人口センサスでは31人だったが、1990年には11人減少した（20人となった）。主にダライフブ鎮とジャルガラント＝ソムに居住しており、モンゴル語を使い、主として牧畜に従事している。

その他：

エチナ旗には少ないものの満州族・土族・ダフル族・ユグ族・オロチョン族・朝鮮族がいる。1990年の第4回人口センサスの時には合計266人であった。多くは中華人民共和国成立以後、仕事の都合や婚入によりエチナに定住するに至った。（Ibid.,129-130）

● 中流域（甘肅省張掖市）

『張掖市誌』においては、民族に関する言及は「第3巻 民族・人口」に存在する。冒頭部分に「張掖市は漢族を主体とする多民族地区であり、漢族・回族・モンゴル族・満州族・チベット族・ユグ族・朝鮮族・土族・壮族・東郷族・プイ族・シボ族・サラール族・ミャオ族・土家族・ウイグル族・イ族・トン族・ヤオ族・リス族・高山族・ダフル族など22民族がいる」との記載はあるが、実際には人口の99%以上が漢族である。ここでは、漢族のほか、他地域との関連から回族・モンゴル族・ユグ族に関する記述をあげておく。

漢族：

紀元前121年（前漢元狩2年）、霍去病の出兵により匈奴が降伏、無人状態になったので移民させて開墾したのが張掖に漢族が入った最初とされている。1778年（乾隆43年）、甘州府の人口は28万人だった。

中華人民共和国建国以後、天津・上海・河南・甘肅の定西の移民が張掖の建設に参加した。1990年の第4次人口センサスでは、張掖市は人口43.38万人、そのうち漢族は43.1万、99.48%を占めている。

回族：

チンギスハンの遠征により、中央アジア・ペルシャ・アラブから軍人・職人・俘虜（女性や子供も含む）として河西に連れてこられたのが始まりとされている。

1873年（同治12年）、左宗棠は甘・涼・肅その他の回民数千人を蘭州・榆中へ移住させ、当

時の張掖には回民はいなくなった。その後、光緒後期に再び流入し、南関に集住した。

建国直前、張掖県には回民が 220 戸、1009 人いた。1955 年には 165 戸、741 人いた。1990 年には 1414 人で、全市総人口の 0.33%を占めている。

モンゴル族：

1901-03 年（光緒 27-29 年）、ハルハモンゴル人が馬山一帯を経て甘州へやってきた。1950 年に南北両山に住んでいたモンゴル族は計 291 人だった。1954 年、康楽区が肅南県へ割譲されたので、平山湖郷の 40 戸、165 人のみとなった。1990 年の人口センサス時には 156 人、全市人口総数の 0.03%を占めている。

ユウグ族：

1990 年のセンサスでは、張掖市のユウグ族は 191 人で、全市総人口の 0.04%。城関鎮（市中心地か？：引用者註）に 144 人、その他は西洞・甘凌郷（市西部）の農村にいる。

表 4：張掖市の民族別人口構成

	1953 年	1964 年	1982 年	1990 年
全市人口数	254900	253531	381955	433572
漢族	254034	252751	380377	431324
回族	588	640	1151	1418
チベット族	5	8	57	172
東郷族	55	0	1	31
ユウグ族	0	3	63	191
モンゴル族	141	86	141	156
満州族	4	6	95	158
その他	73	37	70	122

（《張掖市志》編修委員会 1995:108-110）

- 上流域（甘肅省肅南ユウグ族自治県）

『肅南ユウグ族自治県誌』においては、民族に関する言及は「第 2 編 人口民族」に存在する。本書でもユウグ族をはじめ各民族の来歴などに関する記述があるが、同一民族でも地区によって多様であり特に複雑である。その一方、民族構成に関する数値情報が比較的豊富であるため、ここでは来歴に関する記述は省略し、民族構成に関する数値情報を中心に取り上げたい。

中華人民共和国成立以前、人口は減少傾向にあり、例えばユウグ族は 3000 人に達しなかった。

県の総人口は、1954 年には 7040 人、1964 年には 17964 人、1982 年には 33816 人、1990 年には 35500 人だった。1982 年以前の人口増加に関しては、行政区画の変更・大躍進期の流入農民・70 年代の技

術者招請・大学高校の卒業生の分配・計画出産の実行が遅かったこと・死亡率の低下が要因である。

1990年現在、紅湾寺鎮（県中心地）は全人口5637人で、県総人口の15.88%を占める（1982年の鎮人口は3586人、10.6%）。1990年の民族別人口構成は漢族3568人、モンゴル族24人、チベット族753人、満州族9人、土族42人、保安族3人、ユウグ族1194人である。

表5：肅南ユウグ族自治県の民族別人口構成

	1982年		1990年	
	人口（人）	総人口比（%）	人口（人）	総人口比（%）
全県合計	33816	100	35500	100
漢族	17198	50.86	16983	47.84
モンゴル族	283	0.83	316	0.89
回族	520	1.54	611	1.72
チベット族	7449	22.03	8390	23.63
ミャオ族	3	0.01	0	0
満州族	15	0.04	15	0.04
東郷族	4	0.01	2	0.01
土族	254	0.75	360	1.01
保安族	2	0.01	3	0.01
ユウグ族	8088	23.92	8820	24.85

表6：肅南ユウグ族自治県の地区別人口構成

	漢族	回族	モンゴル族	チベット族	ユウグ族
紅湾寺鎮	3568	0	24	753	1194
皇城区	3530	193	12	2037	1486
馬蹄区	2801	28	15	2343	43
康楽区	1961	170	257	187	1827
大河区	3174	163	4	260	2129
明花区	307	0	2	19	2088
祁豊区	560	8	2	2785	50
皇城種羊場	1082	5	0	6	3

（甘肃省肅南裕固族自治县志编纂委员会 1994:67-69）

● 最上流域（青海省祁連県）

『祁連県誌』においては、民族に関する言及は「第3編 地理」および「第7編 社会」に存在する。前者は現在の民族構成、後者は各民族の来歴など歴史的側面に重点を置いた記述となっている。

第3編 地理より：

祁連県は多民族集住区である。農村・牧区の主要民族は漢族・回族・チベット族・モンゴル族・土族・サラール族である。1985年、全県の総人口37784人のうち、漢族が11959人(31.6%)、回族が11001人(29.03%)、チベット族が9916人(26.2%)、モンゴル族が3622人(9.6%)、土族が656人(1.7%)、サラール族が631人(1.66%)であった。その他の民族はユーク族(31人)、保安族(29人)、東郷族(18人)、朝鮮族(6人)、満州族(5人)、トン族(4人)、高山族(1人)である。

表7：祁連県の民族別人口構成

	1949年	1953年	1956年	1964年	1978年	1982年	1985年
総人口	7715	8023	8303	19140	33031	36405	37884
漢族	1324	1137	1396	6275	10770	11027	11959
回族	1455	1674	1859	4811	9394	10593	11001
チベット族	2695	3272	3053	5080	8580	9690	9916
モンゴル族	2041	1640	1676	2017	3047	3701	3622
土族	106	164	173	290	598	647	656
サラール族	90	122	124	326	550	641	631
その他	4	14	22	48	89	106	99
少数民族計	6391	6886	6907	12572	22258	25378	25925
少数民族%	82.84	85.83	83.19	65.68	67.39	69.71	68.43

(祁連県志編纂委員会 1993:110)

第7編 社会より：

全県で漢語が通用語となっている。民族語ではチベット語、モンゴル語、サラール語、土語などがある。

多隆・黙勒地区(県南東部)ではモンゴル語が主体でチベット語がそれに次ぐ。安柔・峨堡・野牛溝(県中部)ではチベットが主体である。県城および八宝・扎麻什では漢語が通用語であり、一部の中高年層が民族語を使用している。

チベット族：

1822年(道光2年)、果洛河安尼瑪卿雪山一帯の安柔部落が八宝に移動した(安柔部落：1949年の時点で700戸、1000余人)。1901年(光緒27年)、化隆県安什努一帯のチベット族が夏塘台に移動して定住した(夏塘部落：1949年の時点で30戸、150人)。1929年(民国18年)、協和県甘地一帯のチベット族が郭米へ移住して定住した(郭米部落：1949年の時点で10余戸40余人)。

牧畜を主とし、農業を行うものは少数である。主に安柔・峨堡・野牛溝の3郷に集住している。1949年には675戸2695人、総人口の34.93%を占め、1985年には2479戸9916人(男4835人、女5081人)、総人口の26.17%を占めている。

モンゴル族：

モンゴル族が祁連に入ったのは1227年（宋宝慶3年）にさかのぼる。1723年（雍正元年）に清朝が青海モンゴル族ホショート部の首領ロブサンダンジン（*Robson Danjin*）の反乱を平定した後、1725年（雍正3年）に内モンゴルのジャサク制度に倣い5部29旗を編成した。祁連県には6旗が存在した（一部分の牧地は県境を越えている）。1949年の祁連解放当時、500余戸1500余人、総人口の26.45%を占めていた。1985年には906戸3622人で、総人口の9.56%を占めている。

回族：

1895年（光緒21年）、大通・門源などの地から祁連八宝地区に流入が開始し、狩猟・採集・開墾を行った。1949年、全県で回族は360余戸1455人、総人口の5.3%を占めていた。1964年、回族人口は4811人、総人口の25.14%を占め、祁連の少数民族での多数派となった。回族は主に県城と八宝・扎麻什郷に集住しているが、多隆・峨堡などの牧畜地域にも住んでいる。1985年、全県で回族は2000戸、11001人（男5518人、女5483人）であり、漢族に次ぐ人口で、言語的には漢語を話す。

サラール族：

清末民初、すでに少数のサラール族が祁連地区に居住していた。1939年（民国28年）、国民党馬歩芳部隊が八宝に進駐するのに伴い化隆県から10戸40人が来住した。1949年には20余戸90人、1985年には631人（男307、女324人）である。95%以上が八宝郷カリガン村に居住し、農業生産と牧畜および商業に従事している。

土族：

土族は基本的に扎麻什郷河東・河西両村に居住している。1916年（民国5年）に互助県5戸10余人が河東村に移住したのが始まりで、1949年には30戸106人、1952年には113人、1964年には290人、1978年には598人、1985年には656人（男352、女304人）に増加した。多くはチベット仏教徒であり、農業生産に従事し、牧畜を兼業する。

漢族：

清末民初には既に甘肅省民楽・張掖などの地から商売や凶作からの逃避のため移住し、農業や狩猟に従事していた。1949年には1324人で、総人口の17.16%を占めていた。1985年には11959人（男6371、女5588人）で、総人口の31.57%を占めている（*Ibid.*, 497-508）

- まとめに代えて

以上では、個別的な地域に着目してその民族構成について述べた。ただし、個別的な状況に着目したが故に、全体としての人口分布が不明瞭となっている可能性があるため、最後に各地域の人口規模及び主な民族別人口構成に関する表（表8）を示してまとめに代えたい。これを見ると、中流の漢族人口のプレゼンスは圧倒的であり、またそれ以外の地域においても漢族が人口の1/3（祁連県）から2/3（エチナ旗）を

占めている現状が看取できるだろう。

表 8：各地域の人口規模と民族別人口構成

地域名	総人口	主な民族別人口構成
エチナ旗（下流域）	1.5 万人	漢族 1.0 万、モンゴル族 0.5 万
張掖市（中流域）	43.4 万人	漢族 43.1 万、回族 0.1 万
肅南ユウグ族自治県（上流域）	3.6 万人	漢族 1.7 万、ユウグ族 0.9 万、チベット族 0.8 万
祁連県（最上流域）	3.8 万人	漢族 1.2 万、回族 1.1 万、チベット族 1.0 万

● 参考文献（表記は全て漢語による）

- 額濟納旗志編纂委員会 1998 『額濟納旗志』方志出版社。
- 甘肅省肅南裕固族自治縣志編纂委員会 1994 『肅南裕固族自治縣志』甘肅民族出版社。
- 祁連縣志編纂委員会 1993 『祁連縣志』甘肅人民出版社。
- 《張掖市志》編修委員會 1995 『張掖市志』甘肅人民出版社。